受付 -2.3.10 西本人中

第69回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト
宮崎県保護司会連合会会長賞（優良賞）

子供は宝

西米良村立西米良中学校１年　堤（つつみ）　康士郎（こうしろう）

私が住む西米良村の村長は、中学校の入学式の祝辞で、

「子供は村の宝です。」

とおっしゃっていただいた。私はその時驚いた。これまでそんなことを言葉にして言ってくれた人はいない。中学から、西米良村に引っ越し、初めてのことに不安だらけの私にとって、その言葉は何だか照れくさいが、一方でありがたいような、不思議な気持ちに包まれたのをはっきりと覚えている。

近年の日本の社会問題の一つに児童虐待問題が挙げられる。連日テレビやインターネットのニュースでは、幼い児童が親による虐待によって尊い命を失っている事実が伝えられている。少子化といわれる現代日本において子供は貴重だ。果たして、昔はどうだったのだろうか。

戦後の混乱期、私の曽祖父は、ある日何人かの子供を家に連れて帰り、世話をするようになったと母に聞いた。戦争で親をなくした子供を預かることにしたそうだ。曽祖母はたいへん驚いたそうだ。曽祖父母の子供は四人いたが、連れてきた子供も分け隔てなく同じように育てた。最初は二人。それから三人。三人が四人と子供達が増えていくに連れ、住む場所がせまくなった。そこで、曽祖父は勤めていた町役場を退職し、その退職金をもとに、子供達が住める園舎を建て、やがてそれは児童養護施設となった。戦後の混乱期に、皆が必死になって生きようとしていた時代である。曽祖父は、幼い子供を見て、何とかできることはないかと考えたのだろう。未来の日本を担うのは子供だ。「子供は宝だ」という思いが同様に曽祖父にもあったのだと思う。

さて、平成30年度の児童虐待件数は約13万件という事実がある。心理的虐待、身体的虐待、ネグレクトなど様々な虐待がある。ひどいものでは、命をうばってしまうこともある。近年の虐待件数を見ると、なぜ、親が子供を殺すのか。子供は宝ではないのか。

「これは、しつけのつもりだった。」

という言い訳は許されない。どんな子供の命も尊いはずだ。

ただ、実際、赤ん坊を育てるとなると、とても苦労が多く大変だと思う。私には、4歳下の妹と8歳離れた弟がいる。弟が生まれた頃は、とてもかわいらしい存在で、学校から帰ってくると、すぐに駆け寄り、いつまでもながめていたいと思っていた。だが、実際育てるとなるとそうもいかない。数時間おきの授乳やおむつの交換、入浴、着がえなど、母は大変そうだった。しかし、いつも愛情をもって育てていた。虐待する親と何が違うのだろうか。母は、一人で子育てをしてはいなかった。仕事が終わった父が家事を手伝い、近所に住む祖母が、私や妹の世話をしてくれた。散歩に行けば、近所のおばさんが声をかけてくれる。

さらに、この春、西米良村に引っ越してきて思うのは、地域の方々が子供達に優しいということだ。私と妹は剣道を習っているのだが、練習や試合に行くと驚くことがある。弟を連れていくと、地域の方々は、皆笑顔で話しかけたり、遊んでくれたりと、本当に楽しそうに接してくれる。人見知りの強い弟も、ずいぶん早く西米良になれることができた。

母は

「ありがたいね。」

とよく言う。私たち子供の成長は、周りの家族や地域の人の支えもあるからこそと強く感じた。虐待は絶対に許されないことだが、虐待をしてしまう親やパートナーの虐待を見て見ぬふりをしてしまう親、このような人たちには、周りに支えてくれる人がいなかったのではないだろうか。困ったときに相談できる誰か、困っていなくても普段から身近に頼れる人がいれば、虐待は少なくなるのではないだろうか。もしかすると、同じように虐待をされて幼少期を過ごしたのかも知れない。愛情の込められた子育てを伝えてあげなければいけない。そのためにも、地域で子供を育てるという意識や、困ったときは周りの誰かに相談し合うというコミュニケーションができるような環境づくりが大切であると考える。このような悲しい虐待が起こらないためにも、一人一人の思いやりの心で明るい未来を、明るい社会を作っていきたい。